



## 歩行と跛行

——正常および病的歩行の研究——

R. J. et P. Ducroquet・著 鈴木良平・訳

原書は1965年フランスで出版、以後英語訳出版もなされたが、我が国では一部、特に運動動作学関係分野の人達に知られているにすぎなかった。以前よりその内容のすばらしさから日本語訳出版がなされ多くの関係分野への人々に紹介される事が待ち望まれていた本である。今日の運動学の技術研究の進歩はめざましく、歩行に関しても各種機械器具類の急速な開発化、綿密高度な観察検討と臨床面での積極的導入がなされている現状下で特に基礎的な面でこの本が我々に対して示唆するものの意義は大である。大別して3項目に区分して記され第1に歩行の観察と検査方法に関する項目、第2に正常歩行分析の基礎的考察、第3に病的歩行及び異常歩行に関する分析と考察である。いずれの内容もユニークで簡易ながら、かつするどく深い洞察を行っている。特に筆記すべきは臨床的な面と密着しつつのべている事であり、本著の

約3分の2以上を占めて述べられる病的歩行に関しては、実際上の臨床面で遭遇する多数の症例に関する病的異常歩行を身体の間節等で各区分した中でそれぞれについての分析考察をしている。又それに応じた簡易な検査法も述べられている。いずれの場面においても著者の姿勢は出来るだけ簡単な方法でかつ基本的知識に基づいたすどい観察力によりこの病的異常歩行をとらえようとしている事であり、複雑高度な機械器具の使用による検査分析によらずとも臨床面で我々が遭遇する種々の病的異常歩行についても充分有益な分析と導入が可能である事を示唆している事である。運動学並びに歩行分析に関する研究や、臨床家にはその基本的なものにおいて非常に有意義な著書であろう。

(医歯薬出版、B5版、276頁、7,500円、1973)

(甲州中央温泉病院理学療法室、理学療法士 藤本欽也)

## 精神科作業療法の理論と実際

——現状と反省——

井上正吾 編集

この本は、編者が本文で「われわれは作業療法を解体するよりも、新しい理念のうえに精神科患者にとって、当然必要であろう真の作業を理論上、技術上、再編しようとしている」と述べているように、精神科作業療法について、治療であるとか無いとか、使役的作業や、低賃金労働者としての外勤作業のありかたなど、多くの問題を抱えている現状をふまえながら新しい作業療法のありかたを各分野からそれぞれに追求している。執筆者は医師、OT、CP、PSWといった精神科医療に活躍するチームメンバーであり、その内容は厚生省の3年にわたる医療研究助成補助また自治体病院協議会の作業療法研究委員会などがきっかけとなり調査研究された論文が主体となっている。大きく七章に分類され、その範疇に入る論文を総括してまとめ、その後個々の論文がのせられている。例えば第4章「精神療法的作業療法」では序説で作業療法とは何か、作業療法への精神療法的接近、従来の作業療法と精神療法的作業療法の相違や現行医療制

度の問題まで総括して述べたあとに「個人精神療法的なかわりを中心とした作業療法」「病識および現実検討能力などからみた作業療法」……etc.と個々の研究論文が続いている。又、作業療法の点数化問題にもふれ、「法的に治療者の必置条件を確立することが当面の課題であろう」と指摘しており、今回の作業療法点数化実施にあたって本書の果たした役割は極めて大きいと推測される。370頁に及ぶ部厚い本であるが、文章が読みやすく、具体的な内容と精神科作業療法の実態、問題点があまねく浮きぼりにされ、且つ将来への展望や示唆に富み、興味深く一気に読んでしまいたくなる本である。

(医学書院、375頁、3,400円、1973年)

(医療法人清生園、作業療法士 松本妙子)